北原広之の ドレッサージュホースに育てよう！

ピルーエット　パートⅡ

オースミイレブンを調教し始めて2年が経ち、これまでの過程で多くの難題がありましたが、この馬の持つ能力を少しずつ引き出せてきていることを実感しています。本来持つ身体的問題点はこの先もなくなることはありませんが、上手に付き合っていく方向性も見えてきています。現在は、ピアッフェとパッサージュ、1歩毎踏歩変換の調教を中心に行っています。この調教に関しては、サラブレッドにおける収縮運動の難しさや苦労もありますが、馬に強制するのではなく、“導く”ように心掛けています。馬が「なんだ？　ん？　こうすればいいの？　それならできるよ！」と言うように、まずは馬ができる範囲内でチャレンジさせ、少しの好反応も見逃さず褒めてやり、達成感を味あわせて楽しませることをして進んで行くようにしています。それらについては、《ピルーエット》の章が終わり次第ここでまとめていきたいと思っています。

さて今回は前回の《常歩ピルーエット》を基に《駈歩ピルーエット》について段階を追って考えたいと思います。

駈歩ピルーエットの準備

駈歩ピルーエットをするためには、収縮駈歩を確立しなければなりません。それでは、収縮駈歩を確立する過程でオースミイレブンが直面した問題点も交えながらまとめてみましょう。

1．ファーストステップ　≪収縮駈歩（ピルーエットキャンター）の確立≫

ピルーエットを行うための収縮駈歩を確立するためには、前進意欲を生み出し、推進力を馬体（後躯）に溜めることから始めます。では、どのようにパワーを馬体に溜めるのか？　そのキーとなる扶助は、《半減却（半停止・ハーフフォルト）》です。半減却とは、馬が生み出す推進力を騎手が騎座と拳の扶助で馬体に溜めていく作業です。推進力が不足していれば脚扶助で補いながら、半減却を行うための環境を整えます。以下に、このファーストステップを確立するための方法を順序立ててまとめてみます。

① 駈歩で20mの輪乗りに乗る
② 駈歩を半減却の扶助でステップを詰めて収縮を始める
③ 内方姿勢をとりながら、頭頸を低く保つようにしてステップを詰める
④ 輪乗りの大きさを変えずにステップが縮まった収縮駈歩を5～6歩実施する

この収縮度が高い駈歩を5～6歩でよいので、いつでも実施できる関係を築きます。重要なことは、拳の操作が常に強く作用しないようにすることです。もちろん歩度を詰めるので一時的に拳を強く使います。しかし、常に強い拳で抑え込もうとするのではなく、“譲る拳”によって馬が頭頸を低く保てるような関係を築きます。

上記のトレーニングを継続していると、馬は歩度を詰めることを覚えてきます。収縮駈歩を馬自身に維持させるようにするためには、いつまでも騎乗者が強い拳で抑え続けて収縮駈歩を維持しようとしてはいけません。収縮駈歩を求めた際に、騎乗者の騎座と拳を同時に使い、半減却を効かせたら馬の姿勢と体勢を最小限のコンタクトで維持するように拳の操作を緩めます。

このファーストステップがピルーエットを行う上で最も大切な要になります。馬の調教レベルが上がると収縮する割合が増しますが、それはこの駈歩でも同じです。Lクラスではシンプルチェンジがその運動です。駈歩から常歩に移行する際、収縮駈歩を更に詰めた駈歩を求めています。ここで求められているピルーエットキャンターもその延長にすぎません。

駈歩中に騎手は、騎座を馬の背中の動きに合わせて推進しながらも、その動きを制限するように使い、同時に拳を控える扶助と連結させて控えます。それにより馬は前進しながらも、前進しづらくなり、そのパワーを馬体に溜めるようになります。このように、半減却を機能させることにより駈歩の弾発を維持しながら歩幅を狭めていきます。

2. セカンドステップ　≪内方姿勢とラウンド　リラックス≫

収縮駈歩ができるようになると、次のステップはその質の向上です。それは、収縮駈歩をしている後肢が馬体下に進出しながらもリズムを維持し、頭頸がやや低く保たれ背中を緊張させることなく柔軟性を持ち、活気を帯びている状態です。

しかし、これを実践することが難しいのです。通常駈歩が収縮してくると、後躯が沈み頭頸が上がります。馬によっては体を硬くして緊張し、ハミを突き上げて頭頸が上がります。もちろんオースミイレブンもそうなりました。特に苦手な右手前は、駈歩を詰めようとすると途端にそのようになります。そのとき、騎乗者はただ拳を強く控えて我慢するだけでは解決しません。

このときのために私は、初期調教から輪乗り運動で内方姿勢をとることを重要視しています。そして、内方手綱を使い、内方姿勢をとる指示を馬に出すと馬は丸くなり、手綱を譲れば頭頸を更に丸くし下方へ伸展する関係をずっと築くようにしてきています。毎回のトレーニングでその関係を強化し、“約束事”として確立するようにしています。その積み重ねが、このように収縮を求めて馬が緊張する場面でも役立ちます。

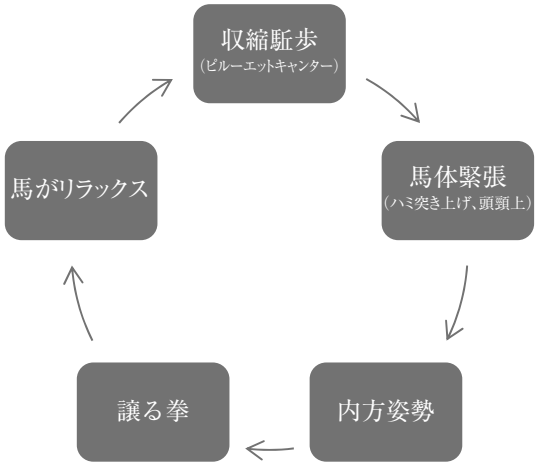
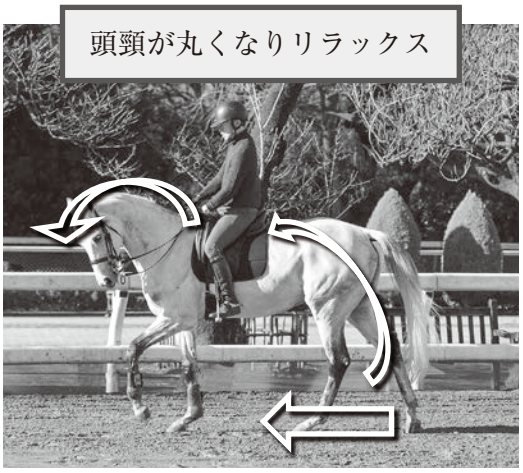
例えば、収縮駈歩から更に詰めてピルーエットキャンターを求めて、馬が緊張してハミを突き上げるように頭頸を硬くしてきた場合は、直ちに駈歩を止めて常歩にして、内方に屈曲させながら“約束事”を思い出させます。そうして再び駈歩発進します。しかも次は発進から内方に屈曲させ頭頸を低く保ちながらゆっくりとした駈歩を生み出すようにします。

常に私の頭にある言葉は、「拳で強く抑えつけるのではなく、拳を譲ると馬の方も力が抜けて頭頸を下げる人馬の関係の構築」です。初期調教からこれらを繰り返して関係を構築しますが、これは既にハミを突き上げて硬くなってしまう馬も手遅れではありません。ゆっくりリラックスする関係を重視して見直せば、いつからでも構築することができます。

収縮時の人馬の関係構築への手順

① 外方手綱にコンタクトを維持しながら内方手綱で屈曲
② 馬が少しでも内方を向く傾向があれば、すぐに内方手綱のプレッシャーをオフにする
③ たとえ馬が強い抵抗を示したとしても、意地になって強くプレッシャーを与え続けないで、逆に譲ることによって馬が力で対抗することを避ける
④ ①でハミへのプレッシャーをかけてから譲る、プレッシャーオン、オフ、オン、オフを小刻みでなく、ある程度の時間（3~5秒ほど）を継続して“じわ~”と内方へ屈曲して、それに反応したことに報酬を与えるようにプレッシャーをオフすることを繰り返す

これらは、いずれも頭頸のみにスポットが当たりがちですが、後躯から前進気勢がハミまで到達していることが前提になります。前進気勢が馬に足りなければ、騎手が脚で真っ直ぐ前進することを促します。

今回は、ピルーエットの準備段階で最も大切な馬への収縮の時に起こりやすいトラブルを解消しておく方法について考えました。ある意味この関係が築ければ、ピルーエットへぐっと近づきます。収縮させると当然上がってくる頭頸を下げさせてリラックスさせることは大変な作業です。しかし、馬の理解を求めながら段階を踏むことによって必ずできるようになります。馬とケンカしそうになりますが、ここはライダーが馬より一枚上手の立場に立って衝突を避けましょう。

次回は、横へ旋回するワーキングピルーエットに進みます。